

アクティブシニアの高齢者住宅の探し方

～インターネットアンケートからの考察～

戦略調査事業部 主任研究員 目黒 義和

はじめに

平成 16 年の高齢化率が 19.5%¹と、「超高齢社会」²へ移行が進む中、自分自身が高齢になった場合の住まいの問題は大きな関心事と考えられる。特に、高齢期には、加齢により心身機能が衰えるため、介助や介護が必要となるケースが多く、また、医療との関わりも考えておく必要がある。このため、大半の人は、「最後まで自宅で暮らしたい」という希望をもつものの、その一方で「家族に介護の負担はかけたくない」という思いも有している。

高齢期の住まいは、その制度として、大きくは厚生労働省所管のもの、国土交通省所管のものがあり、以前は、その開設者が限られていたが、介護保険法施行以後は、民間事業者も手がけられるようになってきている。その一方で、制度外の高齢者住宅として、バリアフリー仕様や各種生活支援サービス機能を備えた高齢者専用の集合住宅の供給もみられており、総じて高齢期の住まいの選択肢は増えつつある。

このため、内閣府の意識調査をみると、「虚弱化したとき望む居住形態」では、「現在の自宅にこのまま住み続けたい」という意向は半減し、高齢者住宅に入居する意向は増加している³。

一方、50 歳代・60 歳代においては、親の介護に直面する世代であり、また、自分自身の高齢期の住まいについても考え始める世代でもある。ただし、この世代と親の世代においては、「介護」と「住まい」についての考え方に相違がある。たとえば、前出の内閣府の意識調査をみると、年代が高くなるにつれて、介護等が必要な状態になっても、「現在の自宅にこのまま住み続けたい」の比率が高くなっており、50 歳代・60 歳代に比べて、自

¹ 平成 16 年 10 月 1 日現在推計人口（総務省）。
² 高齢者人口の割合が 25%を超えた社会をいう。
³ 高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査（内閣府）。60 歳以上の男女に対して実施。この中で、虚弱化したときに望む居住形態として「現在の住宅にこのまま住み続けたい」の回答率は 1995 年（平成 7 年）の 68.4%に対し、2001 年（平成 13 年）は 36.3%。

宅での生活を強く希望する傾向にある。
このような世代間の意識の相違は、高齢者住宅の探し方に影響を与えるものと考えられる。

以上のことから、価値総研では、アクティブシニア（50～60 歳代）に対するアンケート調査を行い、親に介護が必要となった場合の高齢者住宅の探し方・考え方と、自分自身に介護が必要となった場合の高齢者住宅の探し方・考え方などについての相違をみることにした。

ここでは、その概要を紹介したい。
このアンケートは、図表 1 のとおり、インターネットリサーチ会社の登録モニターのうち、50 歳以上の男女に対して調査を行った。ただし、介護については、その経験の有無により、その考え方について大きく差がでるため、今回は介護経験のある人に対して調査を行うこととした。

なお、ここでの「高齢者住宅」とは、高齢者の居住を対象としている全ての「住まい」としている。

図表 1 調査方法の概要

調査対象	インターネットリサーチ会社の登録モニターより 50 歳以上の男女で介護経験のある人
調査方法	インターネットを利用したアンケート調査
調査期間	2005 年 6 月 29 日～30 日
回答者数	1,004 名

親の高齢者住宅を探す場合の視点・ポイント

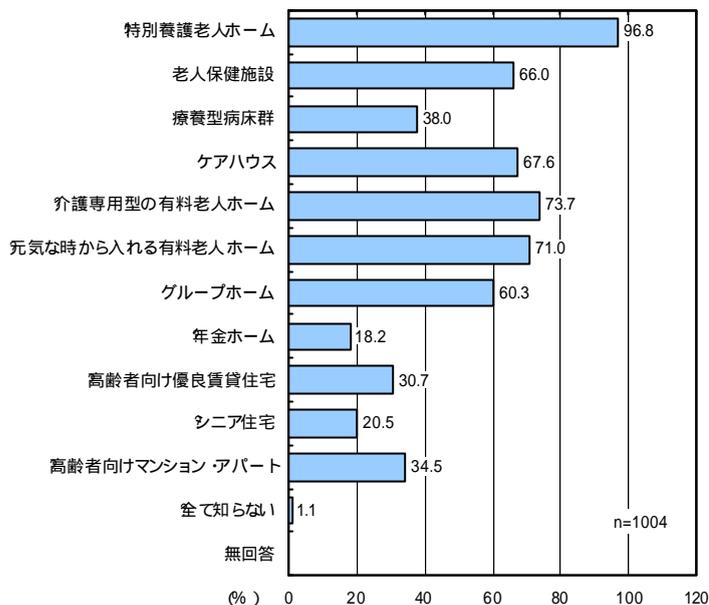
(1) 高齢者住宅の認知度

1,004 名の回答者全員に対し、高齢者住宅の種類を示して、その認知度を尋ねたところ、「特別養護老人ホーム」が最も高く、次いで「介護専用型の有料老人ホーム」「元気な時から入れる有料老人ホーム」などが続いている。

これをみると、相対的に、介護保険制度に関係性が強い厚生労働省所管の高齢者住宅の認知度が高いことがう

かがわれる(図表2)

図表2 知っている高齢者住宅の種類(MA)



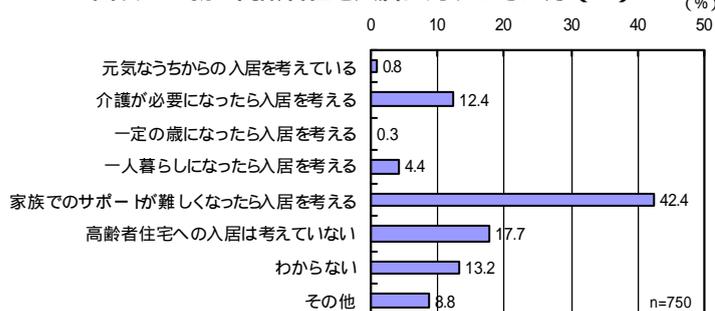
(2) 親の高齢者住宅入居に対する考え方

高齢者住宅を探したことがない人に対し、将来、親が要介護状態など生活に何らかの支援が必要になった場合、高齢者住宅に入居させたいと考えるかを尋ねたところ、「家族でのサポートが難しくなったら入居を考える」が42.4%と圧倒的に高くなっている。

次いで「高齢者住宅への入居は考えていない」(17.7%)、「わからない」(13.2%)、「介護が必要になったら入居を考える」(12.4%)の順となっており、約3割の人は、高齢者住宅への入居自体を視野にいれていないことがうかがわれる(図表3)

このことから、アクティブシニアは、基本的に、親に介護が必要になっても、すぐに高齢者住宅に入居させるという意識は低く、親の介護は自宅でいき、家族介護が難しくなった段階で高齢者住宅への入居を考えるという傾向がうかがわれる。

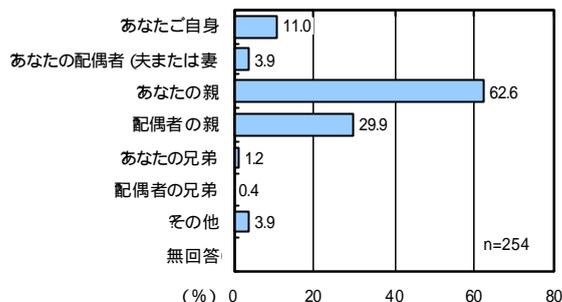
図表3 親の高齢者住宅入居に対する考え方(SA)



(3) 高齢者住宅を探した理由

一方、高齢者住宅を探したことがある、または、現在探している人に対し、誰のために探したかを尋ねたところ、最も多かったのは「回答者自身の親」(62.6%)となっており、次いで「配偶者の親」が29.9%と、その9割以上が「親」のために探したと回答している(図表4)

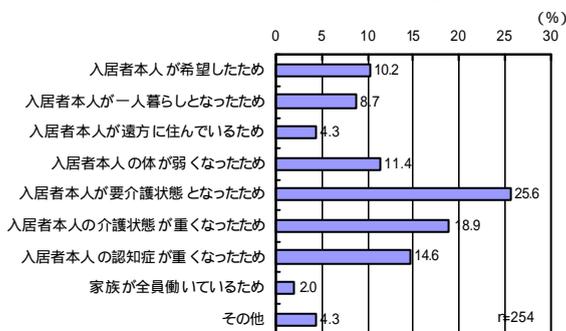
図表4 誰のために高齢者住宅を探したか(MA)



探した理由としては、「入居者本人が要介護状態になったため」が25.6%と最も多く、次いで、「入居者本人の介護状態が重くなったため」(18.9%)、「入居者本人の認知症が重くなったため」(14.6%)となっている。

これをみると、「介護が必要になった」、「介護度が上がった」など、親の身体機能の低下が主な理由となっている(図表5)

図表5 高齢者住宅を探した理由(SA)



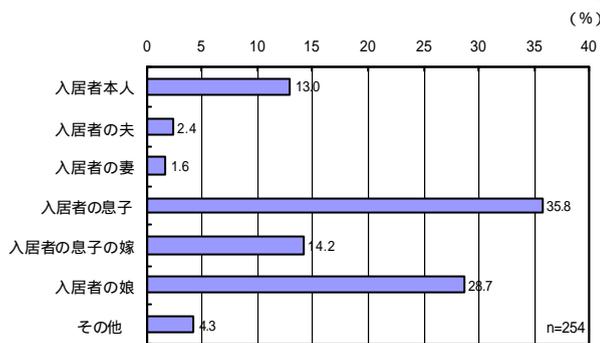
次に高齢者住宅を探すにあたり、最も中心的な役割を果たした家族を尋ねたところ、最も多かったのは「入居者の息子」(35.8%)で、次いで「入居者の娘」(28.7%)、「入居者の息子の嫁」(14.2%)と、入居者の子どもが主な探し手となっている。一方で、「入居者本人」(13.0%)やその配偶者(入居者の夫・妻の合計4.0%)は少ない(図表6)

また、このうち、入居する高齢者住宅を決めた(または入居した)人に対し、決めるにあたり最も中心的な役割を果たした家族を尋ねたところ、高齢者住宅を探す場合と同様に、「入居者の息子」(37.9%)が最も高く、次いで「入居者の娘」(34.5%)と、「入居者本人」の割合は

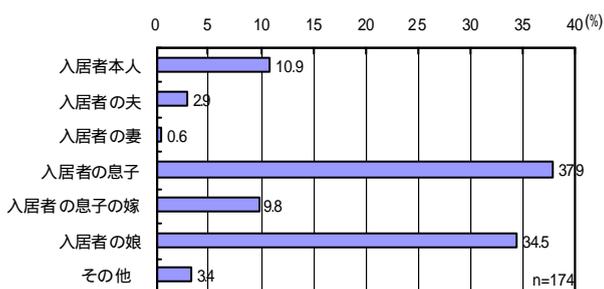
1割程度にとどまっている(図表7)

これらのことから、親が入居する高齢者住宅探しは、「親に介護が必要になった」、または、「介護状態が重くなった」などと身体機能が低下した段階で始めることから、子ども世帯、特に実の息子・娘が中心となっておこない、また、その選定についても、同様に、実の息子・娘が中心となっている状況がうかがわれる。

図表6 高齢者住宅探しで中心的な役割を担った家族(SA)



図表7 入居を決めるに当たって中心的な役割を果たした家族(SA)



(4) 探した高齢者住宅とその探し方

探した(探している)高齢者住宅の種類について尋ねたところ、最も多いのは「特別養護老人ホーム」(62.2%)で、次いで「老人保健施設」(41.3%)「介護専用型の有料老人ホーム」(31.5%)の順となっている(図表8)

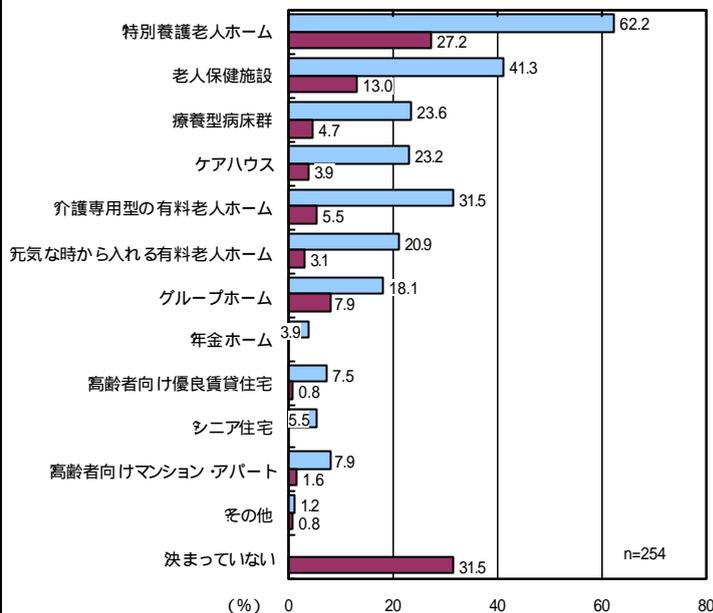
そして、決めた(または入居した)高齢者住宅については、「決まっていない」(31.5%)が最も多いものの、決めた(または入居した)高齢者住宅をみると、「特別養護老人ホーム」(27.2%)が最も多く、次いで「老人保健施設」(13.0%)「介護専用型の有料老人ホーム」(5.5%)となっている(図表8)

なお、探した期間は、「半年程度」(24.7%)「1~3ヶ月未満」(24.1%)「1ヶ月程度」(23.0%)と、概ね半年以内に7割の人が決めて(または入居して)いる(図表9)

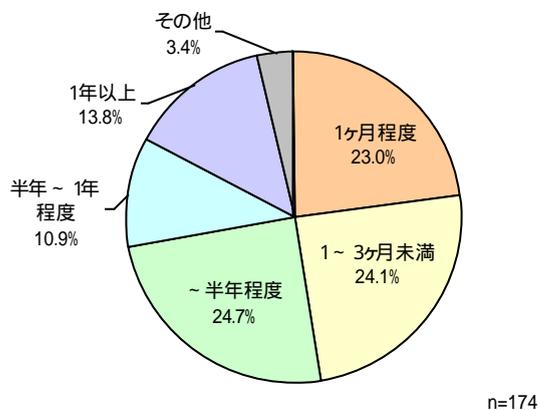
また、決まっていない人にその理由を尋ねたところ(SA)最も多かったのが「空きがないから」が18.8%

と最も多く、次いで「気に入ったホームが見つからないから」(17.5%)「探してまだ間もないから」(17.5%)「月額費用が折り合わないから」(16.3%)の順となっている。

図表8 探した高齢者住宅(MA)と決めた(または入居した)高齢者住宅(SA)



図表9 決める(または入居した)までの期間(SA)

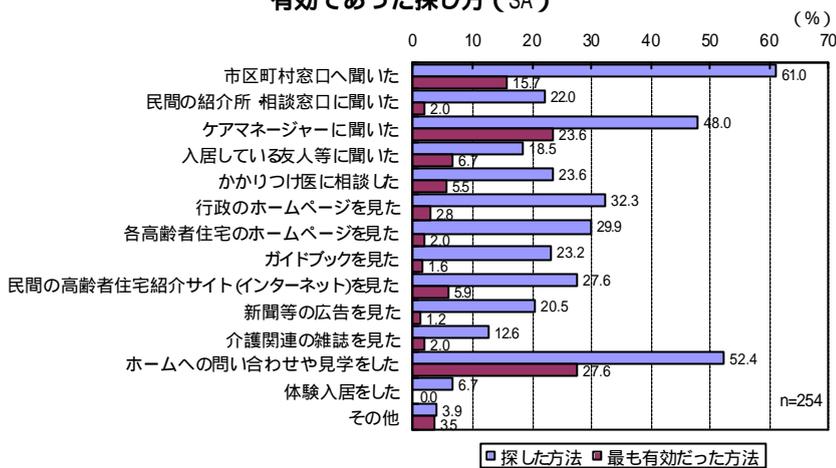


一方、その探し方について尋ねたところ(MA)全体的に多様な方法がとられている。

その中では、「市町村窓口へ聞いた」(61.0%)「ホームへの問い合わせや見学をした」(52.4%)「ケアマネジャーに聞いた」(48.0%)が突出して高い。

ただし、最も有効だった方法を尋ねたところ(SA)「ホームへの問い合わせや見学をした」(27.6%)「ケアマネジャーに聞いた」(23.6%)が高くなっている一方で、「市町村窓口へ聞いた」(15.7%)の割合は低くなっている(図表10)

図表 10 高齢者住宅の探し方 (MA) と有効であった探し方 (SA)



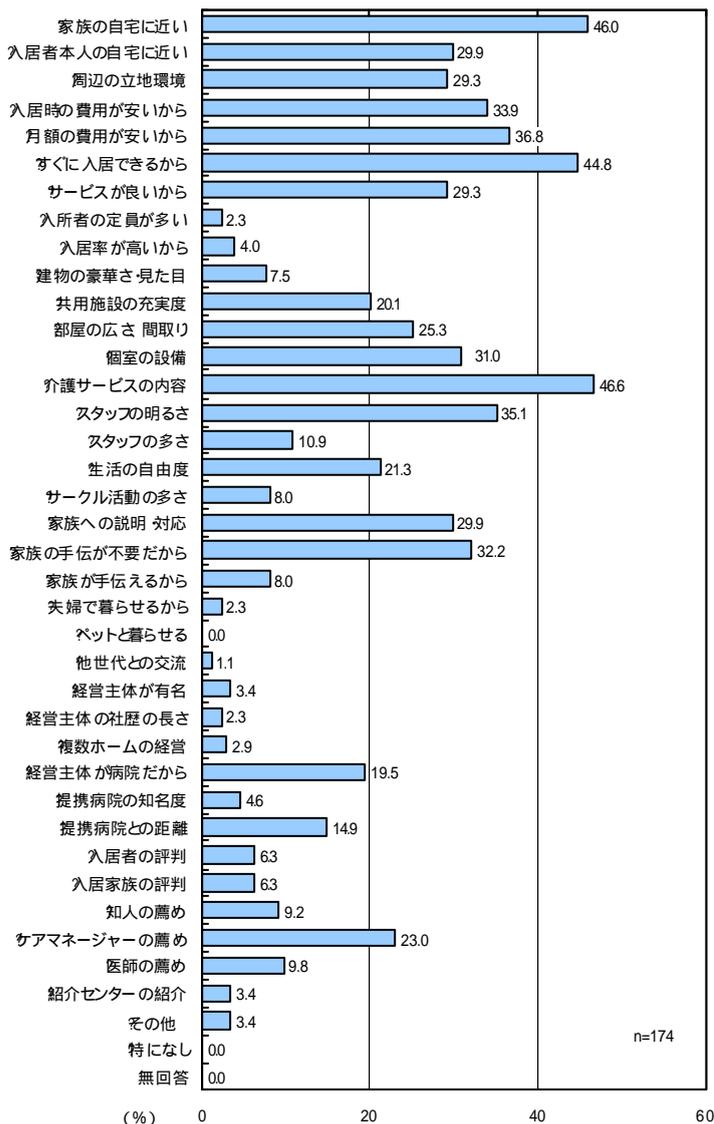
択された。中でも「介護サービスの内容」が最も高く、次いで「家族の自宅に近い」、「すぐに入居できるから」の順となっている(図表 11)。

このうち、最も重要な決め手について尋ねたところ (SA)、「家族の自宅に近い」(13.8%)、「すぐに入居できるから」(13.8%)、「家族の手伝いが不要だから」(10.3%)、「経営主体が病院だから」(9.2%)、「月額費用が安いから」(8.6%)の順となっている。

(5) 高齢者住宅の決め手

高齢者住宅を決めた(または入居した)人に対して、その決め手を尋ねたところ (MA) 同様に多様な視点が選

図表 11 高齢者住宅の選択の決め手 (MA)



自身の高齢者住宅を探す場合の視点・ポイント

(1) 自分自身の場合の高齢者住宅入居に対する考え方

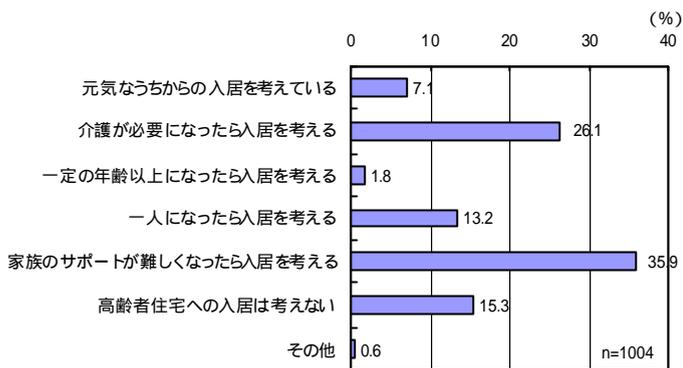
以上までは、アクティブシニアの親が高齢化し、介護などが必要となった場合の高齢者住宅について考え方や探す場合の視点をみてきた。

ここからは、自分自身が高齢化した場合の高齢者住宅に対する考え方や探す場合の視点をみてみたい。

まず、最初に、将来、自分自身の生活の中で、介護など何らかの支援が必要になった場合、高齢者住宅への入居を考えるかを尋ねたところ、「家族でのサポートが難しくなったら入居を考える」が 35.9%と最も高く、次いで「介護が必要になったら入居を考える」(26.1%)、「入居は考えない」(15.3%)との順になっている。ただし、「一人になったら入居を考える」(13.2%)、「元気なうちからの入居を考える」(7.1%)と、約 2 割の回答者が自分に介護が必要になる前に、高齢者住宅に入居する意向があることを示している(図表 12)。

また、これらを自分の親の場合と比較すると、「高齢者住宅への入居は考えない」の割合はあまり相違がないものの、「一人になったら入居を考える」、「介護が必要になったら入居を考える」、「一人になったら入居を考える」、「元気なうちからの入居を考える」を選択する割合が増え、反対に「家族のサポートが難しくなったら入居を考える」の割合が減っていることから、介護経験のあるアクティブシニアは、自身が高齢化した、または、介護が必要になった場合は、高齢者住宅への入居を視野に入れていることがうかがわれる。

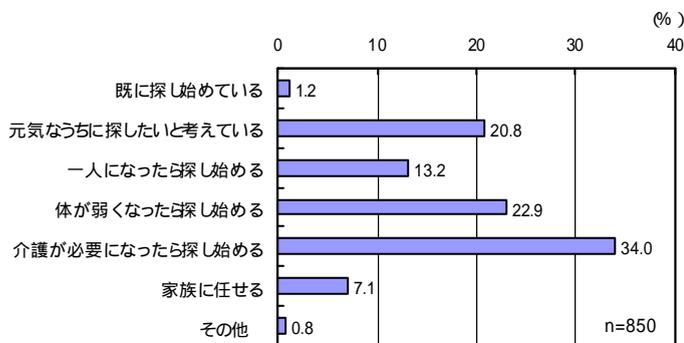
図表 12 自身の場合の高齢者住宅への入居の考え方 (SA)



(2) 自身の高齢者住宅を探し始める時期

次に、「高齢者住宅への入居を考えない」人以外、すなわち、高齢者住宅への入居を視野にいれている人に対して、何時の時期から高齢者住宅を探し始めるかについて尋ねたところ、「家族に任せる」という割合は 7.1%と低く、「元気なうちに探したいと考えている」(20.8%)、「一人になったら探し始める」(13.2%)、「体が弱くなったら探し始める」(13.2%)などと、約半数の人が自分自身に介護が必要となる前に探し始めるとしている(「介護が必要になったら探し始める」は 34.0%)(図表 13)。

図表 13 自身の高齢者住宅を探し始める時期 (SA)

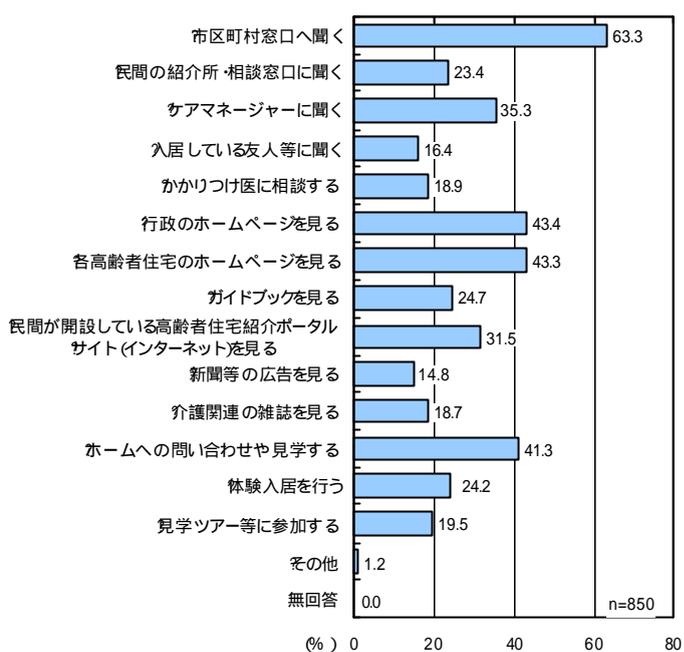


(3) 自身が入居する高齢者住宅の探し方

自分自身が入居する高齢者住宅の探し方を尋ねたところ、親の場合と同様、多様な探し方が示されている。

最も多いのは、「市町村窓口へ聞く」で 63.3%、次いで、「行政のホームページを見る」(43.4%)、「各高齢者住宅のホームページを見る」(43.3%)、「ホームへの問い合わせや見学をする」(41.3%)、「ケアマネージャーに聞く」(35.3%)、「民間が開設している高齢者住宅紹介ポータルサイト(インターネット)を見る」(31.5%)と続いている(図表 14)。

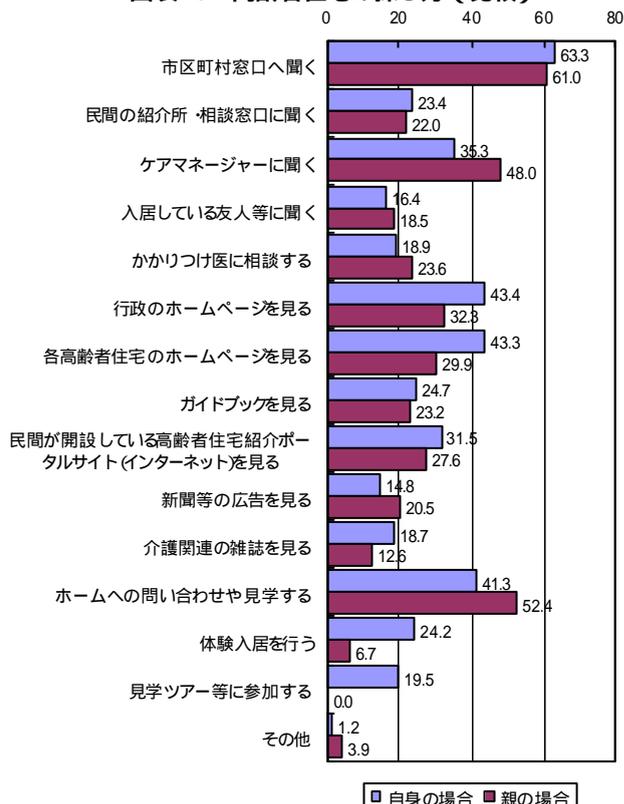
図表 14 自身の場合の高齢者住宅の探し方 (MA)



また、これを親のときの場合と比較してみると、「行政のホームページを見る」、「各高齢者住宅のホームページを見る」、「民間が開設している高齢者住宅紹介ポータルサイト(インターネット)を見る」が増えているとともに、特に、「体験入居を行う」、「見学ツアー等に参加する」の増加が著しい(図表 15)。

これらのことから、アクティブシニアは、自身の目で確認する意向が強いことがうかがわれる。

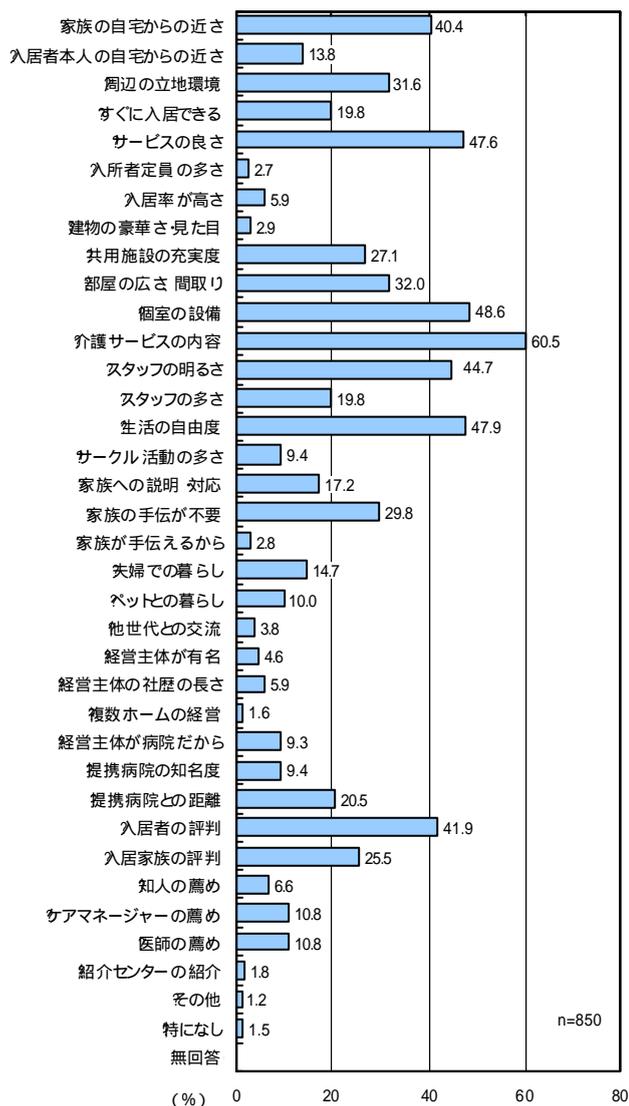
図表 15 高齢者住宅の探し方(比較)



(4) 自身が入居する高齢者住宅選択の視点・ポイント

自分自身が入居する高齢者住宅の選択のポイントを経済的条件を除いて尋ねたところ、その視点やポイントも多様化しており、特に、「介護サービスの内容」は60.5%と最も高く、次いで「個室の設備」(48.6%)、「生活の自由度」(47.9%)、「サービスの良さ」(47.6%)、「スタッフの明るさ」(44.7%)、「入居者の評判」(41.9%)、「家族の自宅からの近さ」(40.4%)が高くなっている(図表16)。

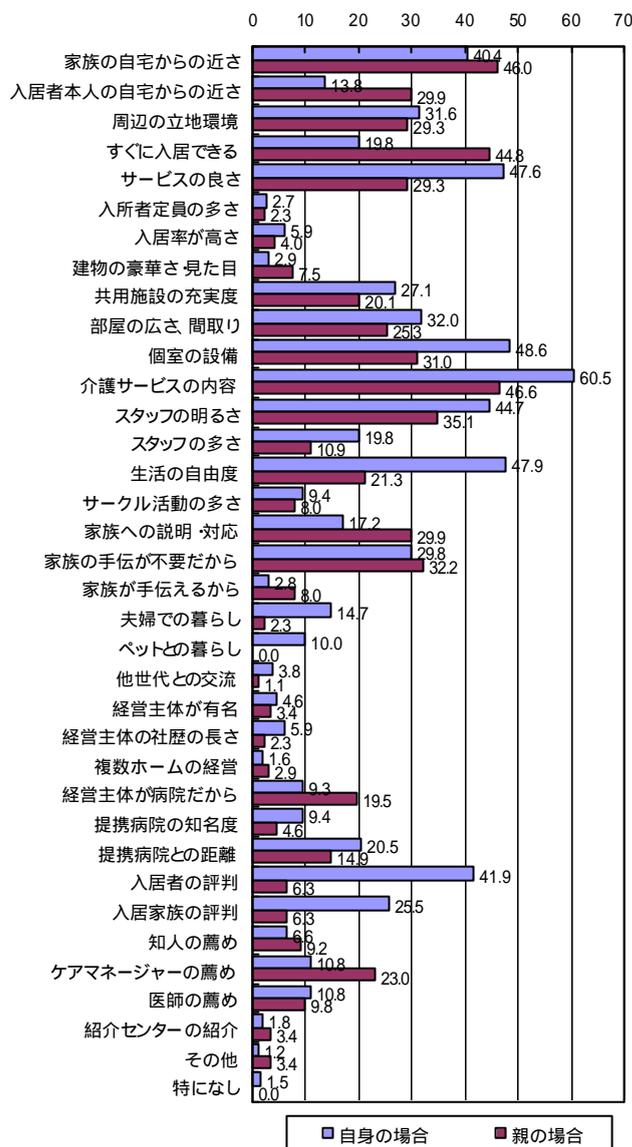
図表 16 自身が入居する高齢者住宅の選択のポイント (MA)



これを親の場合と比較すると、「家族の自宅からの近さ」や「介護サービスの内容」は共通して高いものの、「すぐに入居できる」の位置付けは低く、また、「入居者本人の自宅からの近さ」への拘りが少ない。その一方で、「個室の設備」「生活の自由度」「サービスの良さ」「スタッフの明るさ」「入居者の評判」が重点項目として挙げられているなど、入居後の生活環境重視の傾向がうか

がわれる(図表17)。

図表 17 入居する高齢者住宅の選択のポイント(比較)



おわりに

以上のように、インターネットアンケートの結果を通じて、アクティブシニアの高齢者住宅探しの視点やポイントをみてきたが、改めて、アクティブシニアは、親のための高齢者住宅探すと、自身のための高齢者住宅探しの両方を行う可能性が高いことがわかった。

そして、その視点には、大きな相違があることが明らかになった。

このため、高齢者住宅運営事業等においては、入居する、または、探している世代のニーズや視点を踏まえ、それに応じた情報提供を積極的におこなっていくことが求められよう。